

ヤスパースの「超越的」感性論

—『哲学的論理学・遺稿』よりカテゴリー論をめぐって—

今 本 修 司

今世紀ドイツを代表する哲学者ヤスパース(1883-1969)

は専ら「実存哲学の代表格」として知られるが、彼が戦後自らの哲学を「理性の哲学(Philosophie der Vernunft)」と命名することにより、主に政治—実践哲学の分野で積極的かつ広範囲にその主張を展開したことはあまり知られていない。むしろ彼の唱える哲学の本質とは(1)コミュニケーション(Kommunikation)の敢行—たえず他者に開かれた態度を取りつつ対話を継続させようとする意志、および(2)思惟することの自由—いかなる主義主張をも特定化・絶対化しない、という理性的思考に支えられたものである。しかも彼は直観その他の感性的能力に訴えることなく、あくまでこの思惟を意識一般すなわち「ロゴス=言葉の倫理」に定位しつつ遂行させようとする点で、まさに「哲学」の王道を地で歩もうとしている<sup>(1)</sup>。そのヤスパースが生涯を通じ、自身の主著として構想

していた最大のものは他ならぬ全4部からなる『哲学的論理学(die philosophische Logik)』(以下『哲論』と略す)という大作であった。この第一部はすでに彼の生前『真理について(Von der Wahrheit, 1947)』というタイトルの下に刊行をみたが、第二部以降に予定されていた「カテゴリー論」「方法論」「科学論」の三つは遂に未完のままに終わった。ところが昨年(1991)このいわゆる「遺稿」の断片が編集・刊行され、不完全ながらもその全体像が再現されるに至った<sup>(2)</sup>。そこで本稿では、特にそのなかでも完成に近い状態で整理されている「カテゴリー論(Kategorienlehre)」—分けても「感性論」とも言うべき部分—を中心に探ることにより、ヤスパースが果たしてここできかなる論理学を構築しようとして企図していたのか、その方法的態度を明らかにしてみようと思う。

## 一 「哲論」における「カテゴリー論」の位置づけ

### (1) 『哲論』第二部以降の企図について

『哲論』第一部（『真理について』）においてヤスパースは「包越者（Umgreifende）」という概念で有名な「包越的存在論（Parichontologie）」という独自の世界観の構図を提出し、我々の「主観—客観—分裂」の意識一般のなかで、我々自身および世界が多層的構造を成しており、同時にそれによって真理もまた多義的に現れるという一種の存在の論理を展開した。しかしながら、彼はそれ以前から「存在とは何か」という古代からの哲学の根本問題に対する独自の解答を見いだすべく、より広範囲な視点から存在の論理—体系化を進めるべく構想を練っていた。それによれば、彼は既出の「包越者の諸様態」に基づく分類では、①各々のカテゴリー（概念）が非—確定的で流動的であること、並びに②「超越者（Transzendenz）」「実存（Existenz）」といった概念が個人の真理として妥当性をもつとされるため、その内実は客観的に規定され得ず主観性を免れ得ないこと、などを理由として新たなカテゴリーの枠組の設定が必要である、との結論に達していた<sup>(3)</sup>。

そこでヤスパースは「真理論」の続編として、「言葉

の論理—ロゴス」によって普遍的存在を把握しようとする『哲論』本来の趣旨に鑑み、それを詳細なカテゴリー論によって展開すること（第二部）、およびそこでの論理学の（哲学的）方法論自体を従来の方法論（現象学、弁証法など）と比較したうえで明らかにすること（第三部）、同様に自然科学や社会科学において通常採用されている方法論との相違を明示すること（第四部）をそれぞれ著そうと試みたのである。

### (2) 「カテゴリー論」全体の構成に関して

以上の手始めとして構想されているのは「カテゴリーの体系化（Systematik）」である。「包越者の分類」においてそれぞれのカテゴリー間の関係は厳密でなかったが、ここでは従来の論理学一般において使用されている一連の概念も含め、諸々のカテゴリーに明確な序列と位階（Stufenfolge）が設けられている。ヤスパースは序論においてカテゴリー一般について「一切を言葉によって捉えるということと同時にカテゴリーによって捉えることである<sup>(3)</sup>」という旨を述べる。例えば馬を哺乳類、動物、生物、自然物、もの（Ding）、対象、何かあるもの（etwas）等々、といった次元の異なる様々なカテゴリーによって名指しするように、カテゴリーには様々な段階がありそ

の抽象度にも違いはあるものの、カテゴリーでもって語ることは、たとえ人の名前のような具体的な概念と言えども「普遍性」において語ることである。何故ならば、個人の名前それ自体は確かに代替不可能な特定の対象を指すものであるが、その名前の前個性<sup>④</sup>個人性 (Individualität) という特徴自体はすでに普遍的な性格を帯びているからである。諸々のカテゴリーがすでに普遍的な性格を帯びていることにより、それは言葉により語られる一切の対象の性質を示しうる機能を持つことになるのである。

ヤスパースはこの一連のカテゴリー群を、彼独自の図式に基づき「対象性 (Gegenständlichkeit) 一般のカテゴリー群」「現実性 (Wirklichkeit) のカテゴリー群」「自由 (Freiheit) のカテゴリー群」の三つに分類する。「対象性一般」とはこの場合、事物の高度に抽象的な性質ないし形態を明示するもので、「あるもの (Etwas)」「他者 (Anders)」「一者 (Einssein)」「反対 (Gegensatz)」「否定 (Negation)」「関係 (Beziehung)」などが相当する。一方で「現実性のカテゴリー群」とは、対象が私に対する関係として自己意識によって捉えられた段階について命名されたもので、「時間」「空間」「感官 (Sinn)」「物体 (Körper)」「物質 (Materie)」などがこれにあて

はまる。「自由のカテゴリー群」とはこの三つの区分のうちでもっとも高次のものとされる段階であり、明らかに「私のもの」として意識された対象について言われる——「実存 (Existenz)」「理念 (Idee)」「価値 (Wert)」「現存在 (Dasein)」「悟性 (Verstand)」「精神 (Geist)」などである。或いはこの三段階は、単なる抽象的 (abstrakte) な概念の次元から可視的 (anschaulich) な次元へ、そして可能的 (möglich) な概念の次元への移行過程として見ることができよう。だが、何れにしてもこのそれぞれの相違は単純明快に説明されているわけではない。ところでヤスパースはさらにこれに加え、従来の論理学 (形式論理学) において使用されてきた伝統的なカテゴリーを「認識の基礎的カテゴリー群 (Grundkategorien des Erkennens)」もしくは「普遍的な存在のカテゴリー群 (universale Kategorien des Seins)」として別枠に設定する。例えば「原因 (Ursache)」「動機 (Motiv)」「根拠 (Grund)」「結果 (Folge)」「必然性 (Notwendigkeit)」「偶然 (Zufall)」「可能性 (Möglichkeit)」「全体 (Ganze)」といった具合にである。同様に「量 (Quantität)」「質 (Qualität)」「数 (Zahl)」「生命 (Leben)」などといった、前述のどこにもあてはまらない概念は「特殊なカテゴリー群」としてまとめられる<sup>⑤</sup>。

しかしながらここで重要なことは、いくらこうしたカテゴリーを列挙したとしても、全てを説明することは不可能だという事実的な認識である。ヤスパースはあくまで「カテゴリーの体系化」を存在の全体を明らかにする手段(Mittel)として、「思惟に秩序づけ(Orientierung)を与えるもの」論理のオルガノン(52)」として意義がある、と明言している。彼はそれ故自身のカテゴリーの分類に次のような制限条件を付している<sup>(6)</sup>。

- (1) 一切のカテゴリーの唯一の根拠(あるいは全体)は示され得ないこと
- (2) 他より優越するカテゴリーは存在しないこと
- (3) カテゴリーを産出するいかなる唯一の根本的な方法論も存在しないこと

## 二 ヤスパースの感性論

### —「直観性」とは何か—

#### (1) 「現実性のカテゴリー」一般について

前述の二つの主要なカテゴリー群のうち「現実性(Wirklichkeit)」とごう範疇によって捉えられる対象とは、直接的には①感性(Sinnlichkeit) Ⅱ知覚によって捉えられた内実、②私に反作用、抵抗(Widerstand)を促すものとして立ち現れてくる存在、③素材(Stoff) Ⅱ衣食住に

必要な身の回りの道具、物資、手段の総体、として経験されるものである<sup>(7)</sup>。

さらにこの「現実性」というカテゴリー群は、経験的—実在的な意味において<sup>(8)</sup>まず①直観性(Anschaulichkeit)の段階・感覚され知覚されるものとしての直観の形式または条件(空間、時間)および直観内容(五感の働き、運動)ならびに直観の対象(物体、物質、力)、続いて②思惟によって捉えられた現実性(gedachte Wirklichkeit)の段階:「このもの(Dieses)」「今、ここ(Hier und Jetzt)」「個体(Einzelnes)」「直接性(Unmittelbarkeit)」といった概念によって示される当の対象、および③現実性の総体としての「世界概念(Waldbegriff)」とに色分けがなされる<sup>(9)</sup>。けれどもそこで我々が各自の「感性」によって直接対象を捉えるという経験の第一歩は無論最初の「直観性」の段階において表される。そこで以下、この直観性に関する部分を取りその詳細を追ってみることにする。

#### (2) 「直観性のカテゴリー」とその展開

##### A 空間(Raum)概念<sup>(10)</sup>

ヤスパースはカントの超越論的感性論に倣い「空間・時間」を「表象され経験されうるものであって思惟さ

れうるものではない(94)」という意味で「直観の形式」と呼ぶ。並んで「空間・時間」は対象の現実性を成立させる条件として不可欠であること(95)が言われ、相互の依存性が説かれる(ibid.)。但し、元来自然科学(精神病理学や心理学)に従事していたこの哲学者の本領が発揮されるのはそれからである。彼はまず我々が普段経験し脳裡に思い描く「空間」として「現象学的空間」「ユークリッド的空間」「数学的空間」を挙げる。第一のもの、我々が現に見るままの広がりや奥行きを持った質的・量的な空間のことを指し、ユークリッド的空間とはいわゆる我々がつねにその中にいるところの「3次元空間」のことであり「無制限に無限に分割可能な」一種のモデル空間である。そして最後のものは「 $n$ 次元空間」として表されるような「多次元的な多様性を有する空間概念(98)」であり、特殊な場合にのみ現れる非ユークリッド的空間をいう。

だが空間概念それ自体だけでは「現実的であるか否かは判断され得ない(ibid.)」というのも、それには何より「感性による感覚の経験が必要とされるから(ibid.)」である。そこでこの空間意識の経験に基づいて、空間概念はさらに二つの形式に分類される：

第一の形式：「形態学的空間(morphologischer Raum)」

ユークリッド的空間における我々が見ることの出来る、観察可能な地理学的空間や宇宙空間等々。

第二の形式：「物理学的・天文学的空間」我々が直接見ることの出来ないマクロもしくはミクロ空間(計算により測定可能な空間)を指すもの。

#### B 時間(Zeit)概念<sup>III</sup>

空間概念と同様に、時間概念についてもヤスパーは「現象学的時間」「客観的にみられた現実的時間(objektiv wirkliche Zeit)」「満たされた時間(erfüllte Zeit)」という3つのカテゴリーで分類を試みる。(以下、それぞれについて簡略な説明を列記す)

(a) 現象学的時間…「今、現在を生きている」という時間意識(102)

①「体験された時間(erlebte Zeit)」我々がまことに意識している時間の流れの感覚

②「表象された時間(vorgestellte Zeit)」我々が共有している時間の持続性、直線的時間

(b) 客観的にみられた現実的時間

①「歴史学的(年代学的)時間(historische-chron-

logische Zeit)」「世界史、時代史にあるような断続的(非連続的)な時代区分。

②「数学的—物理学的時間」＝測定可能な、量的な時間経過(時計の時間、日の出・日の入り etc.)。満たされた時間＝

(c)

①「生きられた時間(gelebte Zeit)」＝生の持続状態を示すもの。ベルグソンの durée réelle ; temps vécu に相当<sup>22)</sup>。

②「有機的時間(organische Zeit)」＝生命の交代循環。

③「瞬間(Augenblick)」＝過去—未来に何ら影響やれずつねに現在として充実した今という時間上の点。

ただヤスパースは自らの実存の立場から、この最後の「瞬間における生の充実」を消えゆくはかないものであると同時に最も本質的かつ満たされた現実性として捉えているようである。「あらゆる現実性は、それが真に満たされた時にはただ瞬間という現実性の形でのみ存在する(106)」「その究極の形態は彼が「実存的時間(existentielle Zeit)」と呼ぶもの、すなわち我々が満たされた瞬間のうちで選択や決断を行う、そういう可能性の場(107)である。彼が「超越者」の思想、自身の形而上学

において語っているように、この瞬間において我々は時間の中で永遠なものに直面する、という表現がなされるのである<sup>23)</sup>。

C 直観内容、直観の対象<sup>24)</sup>

空間・時間という「直観の形式」を概観したついでに「直観の内容」とされる感覚の要素(Sinnematerial)と運動(Bewegung)ならびに「直観の対象」に相当する諸々のカテゴリーについても少し触れておきたい。直観の内容としてヤスパースが詳細に整理している感覚領野(Sinneswelt)域は「感覚の図式(Schema der Empfindungen)」という表においては、それぞれ「視覚的—聴覚的な感覚」としていわゆる五感に加え身心の平衡感覚や生理的感覚(空腹感、のどの渇き、痛み)、温度感覚などがあげられ、他方で「遠隔感覚(Fernsinne)」という項目においては、いわゆる身体感覚(Leibesempfindungen)があげられている。同様に運動に関しても、「私の身体的運動として自ら体験する(123)」「ような身体的—生理的レベルから「思惟の運動」「精神の運動」といった心的段階まで広範囲に渡ったカテゴリーの分類がなされている。また「直観の対象」としてあげられているカテゴリーとは、①「諸々の形態(Gestalten)」として特

定の空間—時間内に存在しているもの、②対象の現実性に関係する一般的なカテゴリー群：「物質 (Materie)」「力 (Kraft)」「物体 (Körper)」「因果性 (Kausalität)」など、③感性により「表現 (Ausdruck)」やれ「意味 (Bedeutung)」されるもの、④その他のカテゴリー群：「メカニズム (Mechanismus)」「有機体 (Organismus)」「魂 (Seele)」「精神 (Geist)」といったものである。

### (3) 直観性のカテゴリーを「超越すること」

だが誤解されてはならないのは、ヤスパースはここで例えばカントのように人間の認識の論理を構成する一要素として、或いはヘーゲルのごとく我々の知が展開する一つの移行段階として「直観性のカテゴリー」を叙述したのではけつしてない、ということである。なぜなら、先に述べたように一つのカテゴリー群において諸々のカテゴリーはどれ一つといえども他に優先したり優越性を持ったりするものでなく、いわば全ては平等な並列関係において扱われているからである。

ところがカテゴリー論は、このようにあらゆる領域のカテゴリーを提出し整理するだけで終わるわけではない。そもそもこの『哲論』の趣旨とは「言葉の論理によって、普遍的な存在 (存在そのもの) を捉えようとする試み」

であった筈である。いわば思惟の運動が本質的に存在し、次々とカテゴリーを産出しては新たな存在の把握に向かう、といった実践が背後に存するからこそ、一つの体系化 (Systematik) が可能となるのである。ヤスパースはこの「思惟の運動」を「カテゴリーの絶対化 (Verabsolutierung)」と「カテゴリーの超越的使用 (transzendierender Gebrauch der Kategorien)」という言葉を用いて説明しようとしている<sup>40</sup>。たとえば今「直観性のカテゴリー」として説明した空間・時間概念を例にとってみよう。先例の「ユークリッド的空間」のみの妥当性を認めるとすれば、今日の相対的理論などの物理学の成果によって相対化されている空間概念の多様性の意義が損なわれることになるであろう。また同様に「数学的—物理的時間」を絶対化しようものなら、最早人類の過去や未来、歴史や将来すら問題にされず、ただ単に同じ出来事が機械的に反復するだけの空虚な時間概念しか存在しないことになってしまう——このようにしてカテゴリーの唯一絶対化が阻まれ、否定され限界づけられる。とすれば、既存の空間・時間概念でもって一切が語られるのであろうか。そもそも時間・空間とは「この世界内では閉じていても開いてもない (I12)」「すなわち「有限であるとも無限であるとも思惟できない (ibid.)」という論理

的矛盾を含んだ概念である。或いは端的に「時間」とはつねに「現在であり、瞬間である(113)」と捉えてみた場合、瞬間とはそれを捉えた時点ですでに過去のものとなってしまうような「うつろいゆく存在(ibid.)」であり、いわば「存在するがすでに存在していないもの(ibid.)」という論理的矛盾を含んだ表現によってしか言い表され得ない。他方で「空間」とはまさに「今、この場」を示していると仮に表現したとしても、その「今、この場」とは「世界中いたるところに存在している無数の点であり(113)」、いわば空間の中心が限りなく存在するという一種の表現上の矛盾に陥らざるを得ない——こうしてカテゴリーのそれぞれが持つ矛盾や限界を指摘することにより、我々は絶えずカテゴリーを「超越していく(transzendieren)」ことになる。やがて「直観性」のカテゴリーだけでは「現実性」を捉え尽くせないとされ、この思惟の運動は「経験的現実性(empirische Wirklichkeit)」そして「本来的な現実性(eigentliche Wirklichkeit)」へと飛躍(Sprung)していく。一つの学的立場から(たとえば生物学的に)客観的に観察され記述された自然の対象としての「現実性」は、まだ主体的に捉えられていないという意味で「本来的な現実性」に到達し得てはいない、とされるのである<sup>66)</sup>。

### 三 結論——「超越的方法」の意義——

我々はこのようにカテゴリーに内在する矛盾や限界の指摘もしくは絶対化を阻止する反証を試みることによって「カテゴリーの超越的使用」を継続していく。それを形式的に叙述すれば、諸々のカテゴリーは「(ただ単に) A(だけ)だけでもなく、Bでもなく、Cでも不十分である」あるいは「AであるとするればBという矛盾が生じる」という形で、それぞれの述語内容に異議が差し挟まれることによって、より普遍的なカテゴリーへと「超越すること」が行われる、と言いつづけることができる。それは最終的には「存在とは何か」という課題に答えるべく「存在それ自体(Sein an sich)」<sup>67)</sup>唯一にして本来的な存在(存在の全体)を捉えるための一連のプロセスとして実践される方法論的態度に他ならない<sup>68)</sup>。また、カテゴリー論のあとで構想されている「方法論(Methodenlehre)」<sup>69)</sup>『哲論』第三部においては、この「超越的方法」が古代ギリシア以降の哲学史の伝統を貫く真の「哲学の方法」であると言われ、形式論理学や現象学ならびにヘーゲルの弁証法論理学との相違が対比的に述べられる——言い換えれば『哲論』を貫く思惟の運動はまさにこの「超越的方法」として特徴づけられるのであり、さ

らには精神病理学の叙述をも含めたヤスパースの他の著作群にも一貫して共通する態度とも見られるのである<sup>80</sup>。ここにおいて「論理学」は形而上学の一つの形式を表す手段としての位置づけが与えられているかのようである。しかしながら、その論理学の論理学たる所以を問題視する以前に、我々は差し当たってヤスパースのこの方法論的態度が果たして「哲学の眞の方法」として全面的に承認できるかを問う必要がある——なぜならばこの論理学にはいやしくも「哲学的」という形容詞が付冠されているからである<sup>81</sup>。

## 註

引用箇所末尾に付されている数字は、次の著作の頁数を示す。

Karl Jaspers (Hrsg. von Hans Saner und Marc Hänggi)  
Nachlaß zur Philosophischen Logik, München, R. Piper & Co. Verlag, 1991.

(1) Vgl. Jaspers, Von der Wahrheit—Erster Band der philosophischen Logik—, München, 1947.

(2) 前述の『哲論・遺稿』は昨年2月に編集されたばかりで、翻訳はもちろんこの著作に関する研究成果も筆者の知るかぎりでは未だ報告されていない。従って、

我が国ではもちろん、世界的にも本稿がその最初の公式的な研究報告と考えていただいて差し支えない。

(3) Vgl. Jaspers, Nachlaß, Vorwort (des Herausgebers)

尚、編集者の記述によれば「哲学的体系化(Systematik)」という構想が初めて登場するのは、1920～21年夏学期の一般心理学の講義においてであると言われている。また「包越者の諸様態」とカテゴリー論における諸々のカテゴリー群との関係については、ちょうど前者が座標の横軸とするならば、後者が縦軸に相当するような関係にある。(Vgl. Nachlaß, S.57f.)

(4) Nachlaß, S.3f.

(5) A. a. O., S.57f.

尚、これらカテゴリー群相互の関係については何ら明確な説明がなされていない。但し中心的な3つのカテゴリー群相互に関してはその前後で認識の「飛躍(Sprung)」がある、と言われる。(Vgl. a. a. O., S.83, 200f.) ちなみに、この3つのカテゴリーの分類や名称、その内容の一部はすでに彼の前期の主著『哲学(1931)』第3巻「形而上学」の第2章「形式的な超越すること」(Das formale Transzendieren)に早くも散見される。(Jaspers, Philosophie, 3. Band, "Metaphysik", München, 1931, S.36ff.)

- (6) Nachlaß, S.56.
- (7) A. a. O., S.86-87.
- (8) A. a. O., S.92. 本文中の「経験的現実性＝実在性 (Realität)」に相当する。
- (9) A. a. O.
- (10) A. a. O., S.97f.
- (11) A. a. O., S.101f.
- (12) ヘルグソン哲学の根本概念の一つで、直線的—数学的な時間とは質を異にした、純粹な生命の持續過程を指す。知性ではなく直観によって捉えうるものとわれ  
る。
- (13) Vgl. Jaspers, "Metaphysik", S.55f.
- (14) Nachlaß, S.116f.
- (15) A. a. O., S.50—51, etc.
- (16) A. a. O., S.156.
- (17) A. a. O., S.29f. 及び "Metaphysik", S.37f. "Prinzipien des formalen Transzendierens" を参照のこと。
- (18) たとえばヤスバースの初期の代表的著作『一般精神病理学総論(1913)』、哲学的著作として最初の『世界観の心理学(1919)』および戦前の主著『哲学(1931)』には、全体としてこのカテゴリー論に相通する叙述方法が採用されているように思われる。

- (19) ヤスバースの「哲学的信仰」「哲学的根本操作 (Grundoperation)」「哲学的世界定位 (Weltorientierung)」「哲学的根本知 (Grundwissen)」といった術語に共通する表現である。尚、ヤスバース自身はこの限界づけ矛盾、相対化による思维的 method 的先駆例として、例えばニコラウス・クザーヌスの「反対の一致 (coincidentia oppositorum)」に代表される「否定神学 (negative Theologie)」の立場を挙げてゐる。Vgl. Jaspers, Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, 1962: München, S.391f.

(いままじ しゅうじ) 早稲田大学)